

社会研究部門

川村俊蔵・東 滋
鈴木 晃・小山直樹
森 梅代*¹⁾ 足澤貞成*²⁾

研究概要

1) ニホンザル地域個体群の研究——木曾

川村 俊 蔵

木曾研究林において、3個の大型群と1個の小型群の遊動ならびに群間関係に関する調査を行っている。

2) ニホンザルの社会生態学、とくに自然群の環境利用とクルーピング・社会構造

東 滋・足澤貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れがしめす生活と社会現象をとらえなおすために屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行っている。

3) ニホンザルの地域個体群の動態に関する研究

鈴木 晃

房総半島を中心として、ニホンザルの地域個体群の土地利用、個体群動態、遊動におけるスペーシングの問題、オスの群れの離脱等に関する社会関係等の調査を継続している。

4) 猿害の発生とその防止の研究

川村俊蔵・鈴木 晃

農業者にとっても、ニホンザルの保存についても、由々しい問題である猿害について、その発生機序を知り、防止対策を考え、人間とサルとの調和をはかるべく、長野県上松町および房総丘陵で資料の採集ならびに防止実験を行った。

5) ニホンザルの個体群の生活の維持に対する森林施業その他の human impact の影響の生態学的研究

東 滋

ニホンザル個体群の地域構造や生活のたてかたに与える人為営力の作用を生態学の文脈においてとらえる。もっぱら“自然”の側の反応を、異なる形式あるいは程度で人為の加わった地域間の比

較と、同一地域の時系列的変化の追跡により把握しようとする。下北半島の北西部・南西部の2つの地域個体群についての個体群変動の追跡と岐阜県下の天然林地域と“森林開発”のすすんだ地域の調査を行った。

また平行して、おなじ環境変化がニホンザル以外の森林哺乳動物に与える影響についても調査をすすめている。

6) ニホンザルの社会的発達に関する研究

森 梅 代

これまで主に幸島群を対象にコドモの社会的発達の研究を遊び、子守り行動などを通して行ってきたが、比較のデータを得るために、オープンエングロージャーでの観察を行った。今後両者の比較研究を社会的な場を考慮に入れながら進めていく予定である。

7) スマトラにおける霊長類研究

川 村 俊 蔵

年報第10巻に紹介した、スマトラ自然研究計画に関し、日本学術振興会の派遣により、1ヶ月スマトラに赴き、新設された研究室の譲渡式に参加し、日本側を代表し式辞を述べた資料の展示を行った。

8) 原猿類の社会生態学的研究

東 滋・小山直樹

マダガスカル島の原猿類についての現地調査を海外調査特別事業の1980、1981年度継続計画として行なった。北部で同所的に生息する *Lemur fulvus sanfordi* と *L. coronatus* の群間関係、種間関係、すみ分け、個体群構造、食物空間利用に関する比較社会生態学(東)、南部に生息する地上性の強い *L. catta* の社会行動について、同じような複雄複雌の群れを作るマカク類と比較するという観点から、調査を行った(小山)。

9) アフリカのチンパンジー、その他の霊長類の比較社会・生態学に関するまとめの研究

鈴木 晃

10) ホオジロマンガベイの社会生態学的研究

小 山 直 樹

ザイール共和国東部のイランギおよびチャボバでホオジロマンガベイの食性、遊動、音声などについて調査した。なお本調査は海外特別事業(1981年度)の一部をなすものである。

11) ドリルの生態学的研究

森 梅 代

1) 教務職員

2) 教務補佐員

1979, 1980年にカメルーン共和国エジャム森林保護区で行ったドリルの遊動, 食性などに関する野外調査の資料のとりまとめを行っている。本調査は科学研究費補助金(海外学術調査, 研究代表者, 河合雅雄)によって行われ, 丸橋珠樹との共同研究である。

総 説

- 1) 鈴木 晃(1982): 動物の社会。“生態学読本”(沼田真編) pp. 44-58, 東洋経済新報社。
- 2) 鈴木 晃(1982): 今西錦司——廿世紀科学者——。三省堂ブックレット 3月号。
- 3) 鈴木 晃(1982): 霊長類学の形成と人類起原論。“廿世紀科学史 8巻 生物学”(中村禎里編), 三省堂。
- 4) 小山直樹(1981): カニクイザル社会の特異性: 効率のよい繁殖戦略。アニマ, No 102, pp. 44-49。

論 文

- 1) 好広真一・斉藤良裕・常田英士・和田一雄・市来よし子・福田喜八郎・鈴木晃・山本教雄(1979): 雑魚川および魚野川流域に生息するニホンザルの積雪期における利用地域・個体数・食性。信州大学・志賀自然教育研究施設研究業績 第18号, pp. 34-48。
- 2) Koyama, N. and P. B. Shekar (1981): Geographic distribution of the rhesus and the bonnet monkeys in west central India. J. Bombay Nat. Hist. Soc., 78 (2), 240-255。

研究報告・その他

- 1) Koyama, N., A. Asnan and N. Natsir (1981): Socio-ecological study of the crab-eating monkeys in Indonesia. “Kyoto University Overseas Report of Studies on Indonesian Macaque (1981) 1”, pp. 1-10. Kyoto University Primate Research Institute.
- 2) Maruhashi, T. & U. Mori (1982): A preliminary report on the diet and feeding behavior of the drill, (*Mandrillus leucophaeus*). In: Studies on Living and Fossil Primates in Africa. Reports by Grants-in-Aid for Overseas Scientific Survey.

学 会 発 表

- 1) 鈴木 晃(1982): 各種野生霊長類の群れ構造に関する比較研究。第26回プリマーテス研究会
- 2) 丸橋珠樹・森 梅代(1981): カメルーンにおけるドリルの生態調査。第18回日本アフリカ学会学術大会(1981)
- 3) 丸橋珠樹・森 梅代(1981): カメルーンに生息するドリル(*Mandrillus leucophaeus*)の採食生態について。第28回日本生態学会大会

変 異 研 究 部 門

野沢 謙・和田一雄
庄武孝義・峰沢 満

研 究 概 要

- 1) ニホンザルの集団遺伝学的研究
野沢 謙・庄武孝義・川本 芳¹⁾
ニホンザルの血液蛋白の構造を支配する遺伝子の変異を電気泳動法によって検索し, 群内, 群間の変異性を定量化する。現在までにニホンザル約40群, 総個体数約2,000頭の血液試料について, 約30種の蛋白の構造を支配する計32遺伝子座の検索を行った。このデータをもとにして, 統計的検討を加え, 繁殖単位間の毎代の移出入率, 遺伝的変異の散布範囲などについて定量的推定を行い, ニホンザルの繁殖構造を解明すべく作業を続行中である。1980年には第3次集計分を論文化し, 投稿した。
- 2) *Macaca* 属サルの系統的相互関係
野沢 謙・庄武孝義・川本 芳¹⁾
ニホンザルを含む *Macaca* 属サル各種から採血を行い, 前項1)と同一の方法によって種内・種間の遺伝学的変異性を定量化し, それら種間の遺伝子構成上の差を遺伝距離で表現し, それに数量分類学的手法を適用して枝分れ図を描く。それにより種間の近縁関係, 分化時間の推定等をおこなう作業を目下続行中である。1981年度には, 東インドネシア・スリランカにてカニクイザル, トクモンキーの詳細な資料を得るべく捕獲調査を行い合わせて400頭分の材料を入手し分析中である。
- 3) ニホンザルの先天的四肢奇形への遺伝的アプ

1) 大学院学生